

公民館等

小学校2年生と地域住民がプランター(地域住民宅に設置)で一緒にジャガイモを育てることにより、福祉の心を育てていこうという活動で、子どもたちと地域住民とが長期的に交流することができ、「安全で安心して暮らせるまちづくり」の推進にも役立っている。休日に子どもが保護者を連れてプランターの観察に出かけることで、保護者と地域住民との交流も深まった。

子ども事業では、挨拶、感謝、靴揃え、ごみの処理などを、場面に応じて口やかましいほどに職員がしつけをしてきた。その結果、最近では一言注意を促しておけば、子ども同士で自主的に注意し合い、下級生へ指導する場面も見られるようになった。

体験・交流活動では、参加者が今まで受身的な内容から、主体的に活動に関わるようにすることで、お互いに声をかけ合ったり、周りの人にも気を配ったりする姿が見られ、和やかな雰囲気での交流が深まってきた。



通学合宿で大根抜き

10年目を迎えた通学合宿は、年々定員を上回る参加人数で、嬉しい悲鳴を上げている。大変な事業だが、後日に受ける挨拶は格別で、子どもたちの成長を感じる。

通学合宿を通して、親と子のマナーや考え方などの課題を考えることができ、それらを保育園・幼稚園・小学校・地域に提案して取組を行っている。

各種事業(子ども中心)

サマーキャンプでは、日頃できない体験ができた。自然の中での集団生活は、子どもたちにルールや決まり、コミュニケーションの大切さなどを学ばせる良い機会となった。

おもてなし講座(抹茶教室)を開催し、作法やおもてなしの心について学び、子どもたちの人に対する接し方が変わったように感じる。



地区運動会でのふるまい目標

(通学合宿)

中学1、2年生を対象とした5泊6日の合宿(職場体験)を行った。ミーティングを通して自分たちの生活を振り返り、次第に改善していった。また、食事作りや洗濯、掃除など、普段やってくれている家族の苦勞にも気づき、感謝の気持ちを持って今後は手伝いをしていこうと考えるようになった。

通学合宿は、地域の人が非常に熱心に協力してくれる。子どもの数が急速に減ってきている中で、地域全体がわが子のように思い、子どもたちを立派に世の中へ送り出そうという強い思いがある気がする。子どもたちはこの通学合宿を通して人の温もりや優しさを感じ、自主性、協調性、積極性、礼儀作法を身につけたと思う。しかし、期間を限定した一時的な取組に過ぎず、基本は家庭であり、保護者自身がこの趣旨をしっかり受け止めて今後の子育てに向かわないと、本当の成果を評価することはできない。

〈通学合宿後の保護者アンケートより〉

- 進んで家で手伝いをするようになった。
- 自分で調理し、食事の好き嫌いが減った。
- 落ち着き、素直に謝れるようになった。
- たくさんの力をもらい、今度は自分たち親子も地域の力になりたい。

保護者

保護者には、地域で子育てをし、見守られていることへの感謝の気持ち、また自分自身も地域の力になりたいという心が芽生えてきた。また、他人から叱ってもらうことへの抵抗感も薄らぎ、感謝の心が深まりつつある。

夏休み前の地域座談会(親子活動)は、保護者が司会・記録を務め、子どもは全員参加で行われている。夏休みを前に生活について話し合い、「ふるまい」を向上させるのに役立っている。

親学プログラムや親子活動をすることにより、地域で子どもを育てることの認識が高まった。地域づくり、社会教育の良い起爆剤となった。

地域の中でのマナーなどがなかなか浸透しにくい保護者の世代だが、気づきから築きへと移行する姿もチラホラと見受けられ、挨拶や言動が良くなってきた。

親学を実施する中で、情緒障がいのある子どもの親が、他の親に向けて母としてのしんどさ、子どもをみんなにわかってもらいたいなどの思いを伝えて、保護者間で共有できた。

保育所長を招いて子育て交流会(講演)を実施した。子育てや育児の意識に変化が生まれつつある。



美郷町

地域の方と食事作り

ふるさと運動会において、今回のふるまい標語を子どもたちに決めてもらい、地域全体でめあてとすることで、子どもだけでなく大人も「ふるまい向上」を認識でき、地域挙げてのプロジェクトとして取り組む姿勢が見られたことが大きな成果だったと思う。

地域住民の自発的ボランティアにより、自宅付近で通学・通勤途中、散歩者に対して積極的に声をかける活動を継続している。中・高生にも自然に声かけができるようになってきている。

公民館だよりに掲載したり、子どもの体験教室の案内チラシ等にもふるまい向上のロゴマークを入れたりして、ふるまい向上運動を地域住民へ啓発している。関わっている人には、既存の事業にも「ふるまい向上」の視点を持って指導や協力をしてもらえるようになった。「大人が手本に!」と話されている。

青少年健全育成活動を推進する中でふるまい向上の視点を加えた。講演会や挨拶運動を実施し、各種会合で住民に対してこの活動の趣旨を伝えた。これらにより、子どもたちのあいさつが非常に良くなった。

地域

学校と連携して地域が挨拶などの「ふるまい向上」に取り組んでいることで、徐々にではあるが子どもを含め地域住民にも変化が表れてきていると感じる。そして何よりも、地域住民が学校・家庭・地域それぞれの教育力向上の重要性を認識しつつあるという、内面の変化が見られることがこの取組の成果である。

子どもたちの元気な挨拶が地区民の話題になっている。「ふるまいカルタ」大会を開催し、地域全体の「ふるまい」の意識向上に努めている。

「履物をきちんと揃えること」と「トイレに行ったらスリッパを揃えて出ること」をふるまい向上運動として実施。学校が閉校したため、改めて再認識しながら地域の大人も子どもも取り組むことにした。それは新たな気づきであり、啓発の必要性を感じた。

「青少年の非行・被害防止全国強調月間」にちなみ、家族ぐるみ、地域ぐるみで挨拶運動の徹底を図った。各家庭、各自治会公民館に「声がけポスター」を掲示し、標語入りのティッシュペーパーを各家庭に配布して意識の高揚を図った。その結果、趣旨徹底が図られたこと、大人から子どもまで相互の挨拶が従来にも増して積極的に行われたことは大きな成果であった。

それぞれの活動を通して少しずつ意識が浸透し、ふるまい向上の様子が表れてきた。保護者や家庭は、趣旨は理解しつつも活動への参加にはすぐに結びつかない現状がある。地域は、ふるまい向上の重要性についての認識が広がり、支援したいとの声も強くなっている。子どもたちに地域の中で成長している意識や言葉が見受けられ、挨拶も多くなってきたと地域で評価されている。

地域住民、特に高齢者にとっては、子どもたちとの関わりが生き甲斐づくりにつながり、子育てや地域に役立っていることにやり甲斐を感じている。

各種事業で「思いやりを大切にするふるまい向上運動」を啓発しており、地域住民の意識が向上している。

子どもへの働きかけだけでなく、保護者・地域への働きかけも意識して取り組んでいただいている様子がわかります。